

# 報告

## 「実践を通して表現の源を考える」

ハーフミラー・附属幼稚園・いずみナーサリー

第七回 お茶の水女子大学ECCELL子とも学シンポジウム(二〇一二年十一月)から

刑部育子(大学教員)・ハーフミラーグループ  
伊集院理子(幼稚園教諭)・中澤智子(保育所保育士)

お茶の水女子大学ECCELLは「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」の略称で、乳幼児、学生、社会人が共に学び自らの成長を探求する場の創造を目指しています。今回の子ども学シンポジウムでは、日ごろお茶の水女子大学ECCELLにかかり、「表現」について考え、実践している人たち(ハーフミラー、附属幼稚園、いずみナーサリー、大学教員)が参加者と共に「表現の源」に迫る対話をを行いたいと提案されました。

まず、ハーフミラーについて少し説明をしておきます。本学附属学校では、アートを専門としている

附属学校の教員たちが中心となつて夏休みに「ハーフミラー」という作品展を毎年開いてきました。このハーフミラーという場は、作品を鑑賞する場というだけでなく、日常の教師と子どもの関係が出会い直される特別な場となっています。教師と子どもは、学校では教えられる関係ですが、ハーフミラーでは教師がアート作品を鑑賞に来た人たちをもてなすという、いつもとは異なる関係で出会う場です。さらに、大学の幼・小の教職科目の一つである「保育表現」で行われた大学生の作品もハーフミラーに出されるなど、表現をめぐる学内の人たちの有機的

刑部育子(ぎょうぶいくこ)

お茶の水女子大学大学院准教授。

専門領域は、幼児教育・発達心理学。

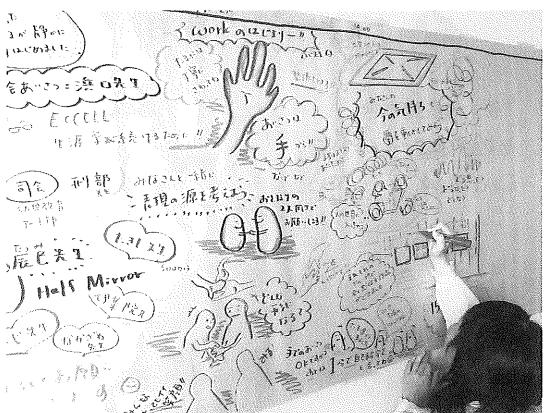
な学びの循環がつくり出されています。

一方、附属幼稚園やいづみナーサリーでは、子どもの表現を大切に日々、保育を行っています。EC CELLが目指しているように、校種を超えて共に学び合い探求する場がシンポジウムを通して創造できるのでないかと考え、「実践を通して表現の源を考える」シンポジウムが企画されました。

シンポジウムは三部構成としました。第一部はハーフミラーにかかる人たちが行うミニワークショップ、第二部は附属幼稚園、いづみナーサリーによる実践事例の報告、第三部は参加者と共に「表現の源」に迫る対話的なトークセッションです。

## スクライバーの紹介

本シンポジウムでは、従来のシンポジウムの形、  
与える側—受け取る側の一方指向的な関係を見直し、  
誰もが自発的に参加し、協同して新たな意味を生成  
していく過程を大切にしたいと考え、「スクリハイバ  
<sup>注1</sup>」という特別な記録者に入つていただくなれた試



## 1 企画

さて～  
何やる～



『表現の源』って  
何だろ？  
そうだ  
手から始めよう

目を回してました。  
何かちがう世界に  
移動しました。

戸惑→集中→夢中という  
ように、気持ちが変化して  
いった気がします。



ホカホカ  
もうすぐクリスマスですね

空 水 空気 けはい  
大地 希望 未来

## 2 打ち合わせ



スタッフ打ち合わせ  
こうやって  
ああやって  
身体接触

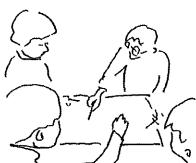
## 3 ウオーミングアップ

指と指でふれあってみましょう。  
何かが伝わってきませんか。  
だんだん緊張がほぐれてきました。



## 4 ドローイング開始

“今”的気持ちを  
そのままストレートに  
Drawing



それぞれのペースで  
心の中のことを  
そのまま手の動きに  
かえていきます。

## 第Ⅰ部 ミニワークショップ

### 6 みあつ



へえ～

限りなく広がつた

4人の表現は

おもしろい



う~ん、どんどん、そ~っ、ちぢ、  
よし!! ぐんぐん…あ、ちにも、  
こ、らにも。

じんじんひがっていいだ。  
ひびがっていいだ。もののかい  
景緑しあわせねりく  
（モニーオウガハ）  
生きつかわる。

肩に力が入りすぎて  
いたが、心は、だんだん  
からんからんしてさうに

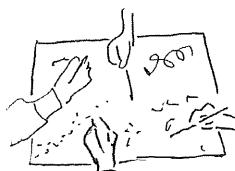
自由だな～。  
のびのびと広がる  
世界！

### 5 まざりあつ表現

互いの表現が

いつしか

自然に溶けあつて…



手が動けば

心も動く

いつしか4人の心も

まざりあつて…

ハーフミラー グループ（辰巳・郡司・瀧田・堀井・野口）

辰巳 費（たつみゆたか）  
アート教育実践家。

郡司明子（ぐんじあきこ）  
群馬大学准教授。専門：美術科教育。

瀧田節子（たきたせつこ）  
東洋大学文学部非常勤講師。元図画工作専科教諭。  
専門：造形表現教育。

## 第Ⅱ部 実践事例の報告

### 1 附属幼稚園の実践

三歳児のA夫。入園当初から面白そうだと思ったことはどんどんかかわっていましたが、やみくも行動しているのではなく、行動する前に周りの様子をじっと見ていました。少し離れた所から入り込むように見て、自分のアンテナに触れるを見つけると、迷うことなく行動に移していくのです。A夫の姿を追っていくことで表現の源にながる何かが見つかることを考え、視覚的な記録（動画、写真）を織り交ぜながらA夫が取り組んできた遊びを紹介しました。

四月、水を入れたビニール袋の中に小さい黄緑色の実を拾って入れ、目の前にかざして、揺れている実の動きをじっと見ていました。次の瞬間、A夫はグルッと回転して、また実の動きを見ました。見て感じたこと、発見したことを、身体を実際に動かして試している子どものありさまが感じ取れました。

（伊集院理子）

十月、木の机を押すことで園庭に線が引け、回ることで弧が描けていることに気付き、自分の軌跡を残す遊びに夢中になりました。

実が落ちている、線が残っているなど、日常の中のちょっとした変化に気付くところからA夫の遊びは始まりました。見ているだけではなく行動に移していくことで、モノや状況に自分ごと（自分の関心事、身体まるごとの両方の意味を込めて）として入り込むことで、子どもたちはまねごと、借りごとではなく、自分を打ち出している、自分ってこうなんだと、ということを表していっているのです。形としては残らないので見逃してしまいがちな子どもたちの行為の中に表現の源があるのではないか、子どもたちが身体で表していることに注目して、感じている世界を保育者がわかるうとすること、「今」心を傾けていることに十分かかわれるようにしていくことが、まずもつて大事なのではないかと考えます。



## 2 いづみナーサリーの実践

いづみナーサリーは〇～二歳児の子どもたちが集う学内保育施設です。小さな子どもたちにとつて、ナーサリーで過ごす時間は生活そのものです。お散歩に出かけたり、友達や保育者と一緒に遊んだりという日常の中で子どもたちがどのようなことを感じたり表したりしているのか。「表現の源」はどこから生まれてくるのか。

ドングリがたくさん落ちる季節、子どもたちは拾うことには一生懸命です。最初のころはどの子もお散歩バッグにいっぱいになるくらい拾い集めていましたが、毎日同じ場所に行く中でその日、その時、その子によつての「お気に入り」「とつておき」「大事」が出てきたようです。

### 「落ちちゃつた」から始まるアート

ある広場でナンテンの実を摘んでいるK子。K子は一つずつ摘んだ後、別の場所に移つてもナンテン



の実が入つたバッグを大事に首から掛けていました。ところが、歩いている時につまづいて、その大切なナンテンの実はバッグから落ちてしましました。しゃがみ込んだK子の周りに赤い実が広がります。そこからK子は実を手に取つては思いのまま置き換えたり、茎を土に挿したりしていました。土の茶色に赤い実がよく映えます。

落ちた時は「あーあ」と思ったかもしません。しかしそこから、地面をキャンバスに、赤い実アートが始まったような気がしました。偶然の出来事から感じること、新しい何かが生まれることが、子どもたちの周りではたくさんあるように思います。とつておくことのできないその時だけの、その瞬間だけの作品や表現は子どもたちの日常の中にあふれています。

（中澤智子）

中澤智子（なかざわともこ）  
お茶の水女子大学附属いづみナーサリー保育士。

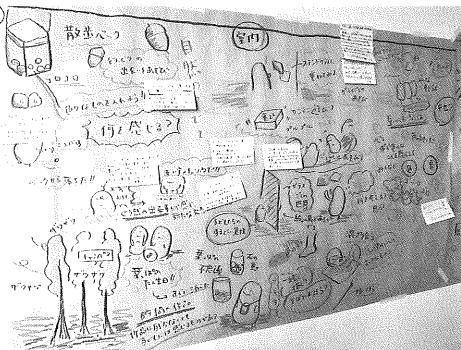
### 第三部　トークセッション

第三部は参加者と共に「実践を通して表現の源を考える」対話的な場になることを願つて企画されました。

最初に、今までのシンポジウムの流れを振り返ることから始めました。この時、新たな試みとして取り入れたドキュメント・ウォール、すなわち、スクライバーレコードと参加者たちが加えた付箋が、振り返りと共有を容易にしてくれました。参加者たちは第三部が始まる前の十五分の休みの時間に、ドキュメント・ウォール上に感想や意見、質問などを記した付箋を付けてくれました。

参加者の付箋には「子どもにとって表現

活動が自らの軌跡を残すことと共に、これまでの経験を経験し直すこととなつてゐるのだろうか」という表現にかかる本質的な問いや、「ドングリ拾いの様子を言葉で表現すると、一人ひとりの様子がこんなにたくさんの方があるんだと思った」等がありました。



トークセッション中盤からは、「絵の具をこぼして家を汚されるようでは困ると保護者から言われるるので、園では思い切った活動ができない」というような現場の本音の話も出てきました。このようなことに対して、参加していたいづみナーサリーの保護者からの「家で汚すようなことはありませんよ」という家庭における具体的なお話や、子どものこぼすという偶発的な出来事からさらに面白い表現が発展することへの着目、このようなことを保証する場があることへの大切さが語られました。さらに、教育では「……ねばならない」に縛られていることがよくあるけれども、アートに携わる人たちは活動の意外な展開を面白がり、そこから表現の世界を広げて

いくことを大切にする視点を持つており、そのような考え方方に学びたいなどの意見も出されました。

今回の参加者は、保育にかかる人だけでなく、小学校の先生方や美術教育に携わる人たち、また園の保護者の方たちとさまざまでした。最初は少し張りつめた雰囲気でしたが、参加者自らが表現にかかるワークを通して、気持ちも和み、笑顔が見られるようになりました。また、第Ⅱ部の具体的な実践事例からさまざまなることを考えるきっかけが与えられ、最後の第Ⅲ部では参加者ご自身の実践の思いや疑問をぶつけてくださいました。このような参加者からの意見に対し、企画者側だけでなく、会場の参加者たちが自分の経験から意見を述べてくださるなど、このシンポジウムに集まつた人たちが第Ⅲ部の対話の場を一緒につくってくださいました。

さまざまな思いを抱えてここにやつて来た人たちが、難しいけれどもこんなことならできるかもしれない、互いの意見を聞くことで小さな勇気をもつて帰られた様子が印象的でした。  
（刑部育子）

## 注

- 1 今回は、看護の仕事や美術教育に携わり、さまざまなワークショップでスクリービング（記述すること）の経験を重ねた木村祐子氏に協力いただいた。  
「ドキュメント・ウォール」の詳細は、茂木一司編集代表『協同と表現のワークショップ』東信堂における原田泰の解説を参照されたい。
- 2 「ドキュメント・ウォール」の詳細は、茂木一司編集代表『協同と表現のワークショップ』東信堂における原田泰の解説を参照されたい。

